



チーフストラテジスト 瀧山裕二の Weekly Letter

第14回「為替市場(ドル=円)について」

今年初から外国為替市場では、「米国が利下げをする一方、日本銀行がマイナス金利解除を実施し、さらには利上げをすることになるので方向としてはドル安円高になる。」と予想する専門家の方々が多かったのですが、昨年末と比べた3月末のドル=円の水準は7%程度のドル高円安となっています。何故なのでしょう？

今週は外国為替市場についてお伝えします。

～外国為替とは～

外国為替とは、異なる2つの通貨を交換することをいいます。例えば、米国との間で商品のやり取りをすると必ずおカネのやり取りが生じます。その時、米国商品はドルで値段がついているので、円をドルに交換して支払うこととなります。この交換する比率のことを為替レートといいます。現在の為替レートは1米ドル=151.33円(4/5東京市場引け値)です。

「最近、為替が円安になり、輸入される商品の値段が上昇し物価高になっている」などとニュースで伝えられていますが、円安、円高とはどういうことでしょうか？円高とは円の価値が高くなること、円安とは円の価値が下がることを言います。具体的には1ドル=100円から1ドル=90円に変動した時が円高です。「円が下がったから円安ではないか」と思われる方もいらっしゃいますが、変動前と比べて10円少ない90円で1ドルと交換できるため、円の価値が高まっています。逆に1ドル=110円に変動した時は10円多くないと1ドルと交換できないので円の価値が下がる=円安となります。

～為替相場の主な変動要因替～

では、このような為替レートが変動する要因は何でしょうか？大きく分けて3つの要因があります。1つ目は当事国双方(ドル=円なら米国と日本)の経済状況(金利、GDP成長率、景気など)、2つ目は双方の国の貿易状況(貿易収支など)、そして3つ目は双方の国の政治や地政学リスク(政局、戦争など)などです。

現在の為替レートは151円台と34年ぶりの円安となっています。この大幅な円安の要因として、多くの専門家が日米の金利差拡大を要因に挙げてきました。今年に入り、米国の政策金利引下げや日銀のマイナス金利解除観測などから日米金利差が縮小、円高に向かうと多くの方が考えていました。しかし、マイナス金利政策は解除されましたが、為替市場では一層の円安となりました。為替レートの変動要因のうち、短期的なものは金利差であると思いますが、長期的な視点で見ると必要もあるのではないかと考えます。

それは、先ほど申しあげました2つ目の為替変動要因、貿易収支(輸出・輸入)です。

下のグラフ1は上が為替レート(週次)、下がわが国の貿易収支(月次、輸出・輸入額は実数)です。緑の線は為替レートが一番の円高(1ドル=75.83円)を付けた2011年10月を示しています。この二つのグラフを見れば一目瞭然ですが、緑の線より左側はドル安円高になりやすい期間でしたが、下の貿易収支を見れば、この期間は貿易収支は黒字(プラス)でした。一方、緑の線より右側、ドル高円安になりやすい期間では、貿易収支の黒字はまばらになり、赤字(マイナス)の領域ではドル高円安が進んでいることがわかります。これらのことから、貿易収支も為替市場動向に影響していると考えられ、金利差の動きだけで為替市場の動きを判断することは難しいと思います。

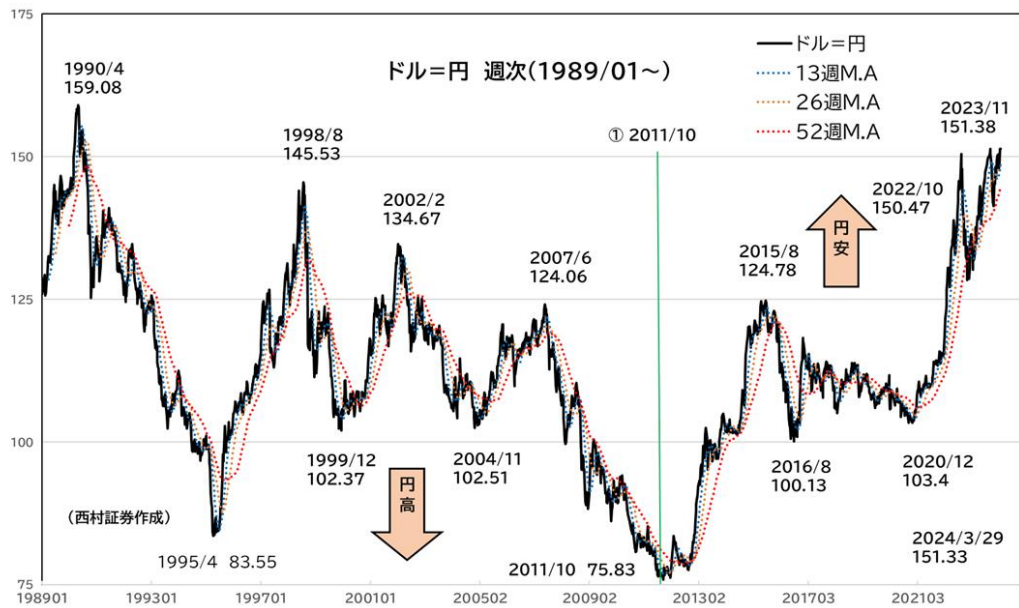
～今後の市場動向について～

さて、直近の米国原油先物価格はガザの紛争によって中東情勢が緊張し80ドル半ばに上昇してきました。また、以前と比べて日本の輸出物品が減少していることも我が国の貿易収支が赤字となりやすい体質になっていると考えられます。今後も貿易面から見た円安要因は継続するでしょう。一方、金利差については、米国景気の緩やかな拡大によって、政策金利の引下げが先延ばしになる可能性も出てきているため、今後も円安傾向は継続すると考えます。そのため、1990年4月の159円台を超えていくような動きとなる可能性もあると考えています。

今月24日13時からの「株恋場（かぶれんじょう）」では、「為替市場動向」などについて解説します。どなたでもご参加いただけるセミナーですので、お気軽にいらっしやってください。

なお、ご参加ご希望の方は右記までご連絡願います。【西村証券 企画部 075-221-2178】

グラフ1



貿易収支（輸出一輸入）

